様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２６３２

研究課題名（和文）漢字圏学習者のための、日本語「漢字音」学習教材の開発

研究課題名（英文）Development of the Learning Materials for Kanji Background Learners; Focusing on Reading Words of Kanji Two Characters

研究代表者
前原　かおる（MAEHARA, Kaoru）

東京大学・グローバルキャンパス推進本部・講師

研究者番号：１０３４５２６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、漢字圏学習者向けの漢字教育の一提案として、漢字2字熟語の読みに焦点を当て教材開発を行った。その主眼は、1)漢字2字熟語の多くが音読みの組み合わせで読めること、2)その一部に規則的に音交替するものがあること、という原理を、タスクを通して学習するものだが、これらの規則を適用して正しく読むためには、日本語の漢字の音読みの特徴や、これらと紛れやすい類似の現象についての知識を正しく持つことも同様に重要であることから、それらを含めた総合的な学習教材の開発を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究による教育提案は、１）単に個別の漢字語彙学習ではなく、未習語にも対応可能な読みの原理の学習であること、２）こうした漢字学習を出発点として、実際の日本語使用場面における聞き取り・表記・発音の安定までもを目指していること、３）これらの知識が、教授者から学習者に対し一方向的に与えられるのではなく、カードタスクなどを通じて学習者が納得して学習できるよう設計されていること、４）中国語の母方言の知識のない一般の日本語教師でも対応可能なこと、といった点に意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the reading words of the kanji two characters and developed the kanji learning materials for kanji background learners. The main point is to master the following principals through the learning tasks: 1) most of words of the kanji two characters are read by the combination of each ‘on’ reading (i.e. on-yomi), 2) the sound change occurs regularly in specific environment. Also, we found that it is important to get knowledge of ‘on' reading in Japanese kanji and of some similar but different phenomena of the sound change above. Based on these findings, we developed comprehensive materials.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教育　漢字教育　漢字圏学習者　漢字音　漢語の読み　音交替

１．研究開始当初の背景

漢字圏（主として，中国，台湾）出身の日本語学習者は，その豊富な漢字の知識に支えられ，非漢字圏学習者に比べると漢字に関しては大きなアドバンテージを持つかに見える。しかしながら，漢字の「読み」のテストをすると，「失敗：×しぱい，しっぱい」のように誤った読み仮名を示すケースは少なくなく，むしろ漢字圏学習者より正答率が低いことさえある。そして，こうした表記の不適正は，その他の技能における弱点（例えば，「聴解」において，スクリプトを見れば難なく理解できるレベルの内容が聞き取れない，「発話」において，発音が悪いために相手に分かってもらえず，いつまでも「筆談」に頼らざるを得ない，など）にも繋がっていることは，多くの現場の教師が経験するところではないだろうか。一方，従来の一般的な「漢字圏学習者に対する漢字の指導」は，教師からは「１つ１つの読みを正確に覚えよ」というメッセージを送るにとどまり，学習者もまた「日本語は漢字の読み方が多いから仕方がない」という態度で学習に取り組まざるを得ないのが実状としてあった。

漢字圏学習者の抱えるこうした諸問題に関しては，従来，特に，聴解教育や音声教育の分野で取り上げられてきた（山本 1994，朱 2010，ほか）。一方，漢字教育の領域からは，漢字（の字形や意味）のわかる漢字圏学習者に敢えて漢字の指導をするという発想自体がそれほどなく，指導するにしても，「字形」の違いか，あるいは「個々の語彙を漢字とともに学習させる」という，いわゆる「語彙学習」に留まることが一般的であった。近年，言語習得における学習者の母語の影響や，情報処理のメカニズムに関心が向けられる中，日中同形語の意味，用法の異同やその処理過程に着目した研究が見られるようになってはいるものの（小森他 2008，小室リー 2010，ほか），これらもまた，あくまで個々の語彙レベルでの議論が一般的であり，学習者が，未習の漢字語彙に対応したり，日本語の漢字語彙の音声と表記を有機的に結び付けたりする手がかりを与えるものとは言えなかった。その中にあって，漢字圏の上級学習者に対し，その母方言の音声的特徴の知識を利用することで，入声音を含む漢語の体系的な指導を提案する研究(黒沢 2012，ほか)は注目されるものであった。しかし，国内外の一般の教授者が，中国語の諸方言について詳細な知識を持つ場合ばかりではなく，また，漢字の「読み」の問題が日本語の運用（語彙獲得，聞き取り，表記，発音等）に影響するのが必ずしも上級に達してからではないことを考えると，それより早い学習段階から，体系的かつ効果的に，漢字音とその表記のシステムを学習できる教材の開発が必要と考えるに至った。

２．研究の目的

本研究は，漢字圏学習者に対し，その「資源」であるはずの豊富な漢字の知識をうまく活用することで，日本語の漢字を読む方法を体系的に学習するとともに，それを通して，漢字圏学習者の聞き取り・表記・発音の安定までをも射程に入れた教材の開発を目指すものである。この目的から，主として扱う語を，漢字 2 字の熟語の中でも，特に，「音読み＋音読み」で読む語（以下「漢語」とする）とした。これは，日本語の語彙体系において，漢語が占める割合がきわめて高い（旧 2 級語彙の範囲で，漢字 2 字熟語のうち 88%が「音読み＋音読み」で読む漢語である）こと，一方，漢字圏学習者が日本語の語彙の中でもっとも母語との近さを感じられるのが漢語だと考えられ，そこを「攻略」することが，学習者の資源を生かすという観点からも有効と考えたためである。

なお，漢語を読むための規則（後述）自体は，これまでの研究でも整理されてきたが（加納 1998，徳弘 2014，ほか），本提案は，そういった知識を，教授者から学習者に対し一方向的に与えるのではなく，カードタスクなどを通して，学習者が納得して学習，運用できることを重視した授業用の教材として設計を行う点に独自性がある。あわせて，中国語の母方言等の専門的な知識がない一般の日本語教授者にも扱えることを前提に，教材の開発を目指した。

３．研究の方法

上記の目的を達成するために，以下のように研究を進めた。

(1) 漢字圏学習者が抱える漢語の読みの困難点を明らかにするとともに，それに影響を与えている要因を分析する。
(2) 日本語の漢語を読む基本原理，および，それに関連する周辺現象を整理し，漢字圏学習者に必要な学習項目と提示順序を検討する。
(3) 教材の試作版を作成し，実際の授業の中で試用する。学習の観察や追加の調査を行いながら，必要な改訂を行って，教材の完成を目指す。

４．研究成果

(1) 漢字圏学習者の読みの困難点やその要因の抽出

本研究に先立つ筆者らの研究（増田他 2013 など）で，漢字圏学習者の漢語の読みの特徴として，①単漢字の「基本音」の読みの意識が薄く，②熟語の読みをあくまで既習語(の聴覚印象)を参照して考えていること，その結果，③平易な漢字の組み合わせでも未習語が読めず，④読んでも「別表：×べぴょう」のような，ありえない「読み」を示すこと，⑤特に１字目末の「ん」の後で有声・無声が対立する語で正答率が下がること（例：「満帆：×まんばん」，「難関：×なんがん」），などが明らかになっていた。本研究期間には，さらに，学習者のアウトプットや，

学習時の録画記録の分析を進めることによって（渡部他 2015b ほか），①清音で読むべきところを濁音で読む（例「反対（×はんだい），②半濁音で読むべきところを清音で読む（例「新婦（×しんふ）」），③促音にすべきところをしないで読む（例「鉄器（×てつき）」）などに誤読が多いという特徴が抽出された（前原他 2017）。

なお，当初の予定にはなかったが，欧米などのいわゆる非漢字圏出身でありながら，中国語の学習歴を持ち，それを経て新たに日本語学習を開始する学習者が，近年，筆者らの所属機関で増えていたことから，こうした新たな学習者層に対する調査も行った（前原他 2016b）。これらの学習者の場合も，中国語学習を経て得た知識が，意味や字形の理解において有用であることが窺われたが，特に日本語初級者には，音の面で活用することの有用性はあまり認識されていなかった。このような群の学習者を観察したことで，本研究課題の主たる対象である漢字圏学習者の特徴，すなわち，特に「音」に関して，母語の負の影響を受けている可能性が一層明らかとなった。

(2) 学習項目と提示順序の設計

上述のとおり，漢字圏学習者は，1）清／濁／半濁音，および，2）促音の有無の関わる読みに関して，混沌とした状況を抱えているが，これに対して，実際の日本語の漢語の読み方は，各漢字の音読み（以下「基本音」とする）を基に次の原理で決まる，シンプルなものである。

［Ⅰ］一般的には，各漢字の基本音をそのまま繋げて（＝音交替させずに）読む。
例. 反(はん) ＋ 対(たい) → 反対(はんたい)， 作画(さく) ＋画(が) → 作画(さくが)
［Ⅱ］所定の条件（＝下記【　】内）に該当する場合のみ，基本音を他の音に音交替させる。
A. 2 字目先頭の h/p 交替（＝h の p 化）【「ん」の後】　新(しん)＋婦(ふ)→新婦(しんぷ)
B. 1 字目末の促音化：「つ」の場合【k,s,t の前】発(はつ)＋行(こう)→発行(はっこう)
〃　　「く」の場合【k の前】　国(こく)＋会(かい)→国会(こっかい)
A＋B.　1 字目末の促音化＋2 字目先頭の h/p 交替【「つ」＋h】
出(しゅつ)＋発(はつ)→出発(しゅっぱつ)

この［Ⅱ］は規則的な現象（以下「音交替規則」とする）であり，上の所定の条件（環境）に該当すれば，語には依存せず，どの語についても（きわめて限られた例外を除いて）適用されるルールである。それにもかかわらず，学習者に上述のような混乱が起こるのは，大別して 2 系統の事情があると分析された（以下では，漢語における半濁音化（h/p 交替）の規則(上記［Ⅱ］の A)をめぐる点を挙げる）。

①「半濁音化規則」によって交替する語（例：「新婦」）に似て非なる現象，あるいは，全体像から見るときわめて限定的な現象の存在があることで，あたかも「濁音化規則」があるかのように思わせてしまっている点

a)「三本（さん-ぼん）」「三百（さん-びゃく）」／「三泊（さん-ぱく）」「三班（さん-ぱん）」に見られる，p と b の混在や，「三千（さん-ぜん）」「三足（さん-ぞく）」に見られる，基本音が清音である語の「濁音化」など，数詞・助数詞に固有の現象。
b)「本箱（ほん-ばこ）」「桟橋（さん-ばし）」など，主に訓読みの語に頻出する連濁の現象（一部，「南北（なん-ぼく）」「軍配（ぐん-ばい）」音読みにもあり）。
c)「難波（なん-ば）」「新橋（しん-ばし）」の 2 字目の濁音化や，「豊田（とよ-だ／とよ-た）」等における清濁の読みの混在を有する「地名・人名」。
d)「温存（おん-ぞん）」/「現存（げん-そん）」の「存」など，漢字が音読みを 2 つ以上有し，その語頭が清濁のみ異なるケース。（学習者には音交替のようにも映る）
e)「論文（ろん-ぶん）」「運動（うん-どう）」など，音交替を経ず，漢字の 2 字目の基本音自体が濁音であるケース。

② 母語である中国語で漢字を知っていることの影響と見られる点

f）p が b に聞こえるなど，「清濁」の弁別が一般に苦手であるという，母語を通して形成された音声の「聞こえ」の傾向。
g）中国語での同じ漢字で，読みが異なるものの存在。（例：「輩」bai，「波」bo，など）

こうした分析から，本開発教材では，基本音と音交替規則の学習を柱としながらも，その確実な適用を支えるために，「仕分け」の方策として，「漢語とそれ以外の語との仕分け（図 1 の★の線）の方法を知ること」「隣接する現象（図 1 の a～d）と

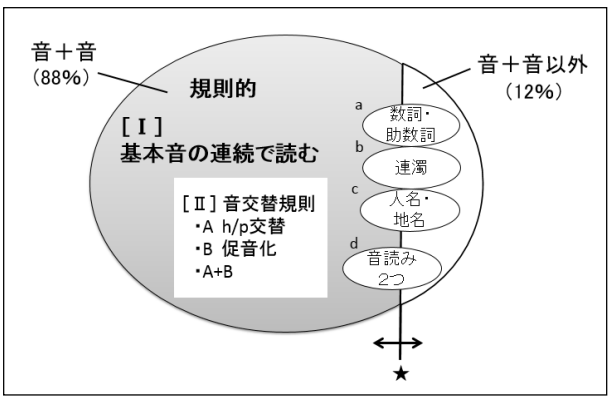

図 1　2 字熟語の読みにおける類似の現象との仕分け

の仕分けの手がかりを与えるとともに，母語で得た知識（上記 f～g）もまた，学習を阻害する要因となっている可能性があること，そしてそれらはいずれも新たな語を読む際の参考にしないよう注意喚起すること，までを含む必要があるという見解に至った（前原他 2017）。

以上のような分析をふまえ，表 1 のようなシラバスを策定し，これらに各種のタスク・練習を伴った教材の開発を行った。なお，当初は，90～100 分×4 コマで完結するコースを構想していたが，最低限のポイントを学習するには 3 コマ程度でも可能，一方，学習したことの定着を図るためには 5 コマ程度以上の時間をかけるのがふさわしい，といったことが，実践を続ける中で明らかになってきた。また，実際に，機関ごとの事情で，漢字学習に割ける時間や期間が異なることが予想されることから，3 コマの分量を基本としつつ，随時，各種のタスクや練習問題を追加するような形で設計することとした。

表 1 主な学習項目

	概要	ポイント
予備知識(1)	・「陸橋」の読みが「りく**はし**」では なぜダメ ？	熟語の音読み･訓読み
単漢字と基本音	・「費」「否」の読み方は 「ひ」?「ぴ」?「び」？ ・「予定」の読みが「**よう**てい」では なぜダメ？	単漢字に基本音があること
音交替規則	・「開発(かい**は**つ)」なのに「原発(げん**ぱ**つ)」？	2 字目頭の〈h/p 交替〉
	・「国際（**こく**さい）」なのに 「国会(**こっ**かい)」？	1 字目末の〈促音化〉
予備知識(2)	・「本箱(ほん**ば**こ)」なのに「漢方(かん**ぽ**う)」? ・「三杯(さん**ば**い)」なのに 「乾杯（かん**ぱ**い）」？	類似の異なる現象 （連濁，助数詞）との仕分け 等

(3) 教材の作成・試用・改訂

以下に教材例の一部を挙げる。

【カードタスク】―音交替規則への気づきを促す―
カードに書かれた漢語について，その漢字の単漢字としての読み（例:「月報」の下の「げつ」「ほう）から，語としての読み（例:「げっぽう」）を推測し，その２つ目の漢字の読み方（例: 報＝ぽう＝p）に応じて，表の適当な欄 h/p/b にカードを置く（図 2）。漢語の語中の「h/p/b」の対立が何によって決定されるかを，学習者に意識させるのがねらい。

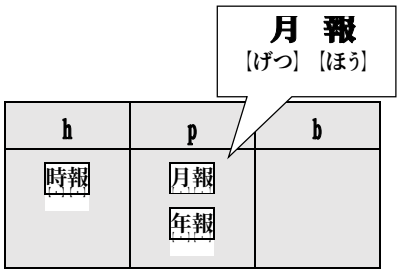

図 2 「カードタスク」の例

【フラワータスク】―基本音のイメージづくり―
単漢字の読み（例：「材」）を中心とし，「フラワー型」に配置された語例（例：「木材」「題材」等）を見ながら，単漢字と語例との音の対応関係を見ていく（図 3）。
語例の一部には，誤ったふりがながふられており，その修正を通して，単漢字についての認識を深める。

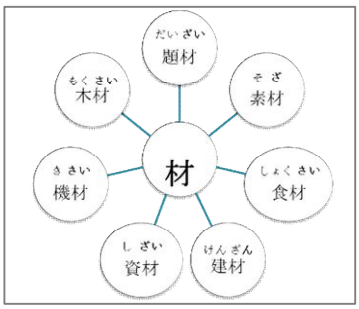

図 3 「フラワータスク」の例

【応用タスク】―音交替知識の日常生活への活用―
ニュースなど，まとまりのある音声情報を聞いて，文章中の空所に適当な漢語（未習語を含む）を補充するタスク。
漢字の基本音及び音交替の知識を活かし，耳から得た音を，特定の文脈に照らすことで，未習語彙であっても適切な漢字が選択できるよう段階的にトレーニングを行うもの。
また，例えば，学習者自身の耳には「突発：×とっぱつ」と聞こえようとも，日本語では，「発（基本音：はつ）の交替後の音として『ばつ』はありえない」「促音の後に有声音は来ない」といった知識の適用により，正しい綴りを再現し，それを通して聞き取りの安定が図れるよう，目指した。

このような教材を使っての授業実践は，本所属機関の漢字圏学習者向け漢字クラス（13 週の通常コース内に設置のクラス，3～5 日間のスポット講座等）において，初中級・中級・中上級といった異なる日本語レベルに対して行った。さらに，海外（中国国内）の大学の協力を得て「出張授業」も行い，属性の異なる学習者に対しての本教材の有効性も確認した。

授業後のアンケートからは，「このような規則があることを初めて知った」「初めて見た語が読めるようになって，自分でもびっくりしている」「知識を活用できるようになったおかげで，キーボードのローマ字入力が速くできるようになった」など肯定的な声が多く聞かれ，本提案による学習に一定の成果があったことが示唆された。しかし，その一方で，短期間に学習しただけでは，時間がたつうちに先述のような類似の現象との混乱が再び見られるようなケースも見られた。また，当初は，レベルに関して，初中級・中級・中上級といった各レベルへの対応

を想定しており，実践も行っていたが，「学習者が，自身の既習語をもとに，規則をあてはめ基本音を抽出し，未習語を読む」といった学習活動に象徴されるように，ある程度，日本語の語彙がたまってからでないと，充分に目指す活動が成立しないなどの問題点にも直面した。前者については，規則の定着を図るタスクや練習問題の増補をすることで，後者については，今回主たるターゲットとした中上級のほかのレベルにも範囲を広げて有効な学習内容・方法を検討することで，解決を図っていきたい。

【引用文献】＊本研究期間の筆者らの研究成果は，5 節にあるため，ここには挙げていない。
加納千恵子(1998)「漢字音の促音化について」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』13.
黒沢晶子(2012)「中国語母語話者のための漢字音教材開発」『2012 年日本語教育国際研究大会予稿集』.
小室リー郁子(2010)「中国語母語話者にとっての漢字語彙」『実践・漢字指導』くろしお出版.
小森和子他(2008)「中国語を第一言語とする日本語学習者の同形語の認知処理」『日本語科学』23.
朱春躍(2010)『中国語・日本語音声の実験的研究』くろしお出版.
徳弘康代(2014)『日本語学習のためのよく使う順漢字 2200』三省堂.
藤田朋世・前原かおる・渡部みなほ・野口真早季・増田真理子（2015)「漢字圏学習者のための漢語にフォーカスした「聴解タスク」の開発」『日本語教育方法研究会誌』22-1.
前原かおる他(2014)「中級漢字圏学習者向け教材「4 日でマスター日本語の漢字音の開発」『2014 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』.
増田真理子他(2013)「初級後期段階から始める，漢字圏学習者の漢字音「再学習」支援の試み」『日本語教育方法研究会誌』20-1.
山本富美子(1994)「上級聴解力を支える下位知識の分析―その階層化構造について」『日本語教育』82.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

① 前原かおる・増田真理子・藤田朋世・渡部みなほ・菊地康人，「漢字圏学習者の漢語の「読み」の安定のための指導提案―読みを困難にする種々の原因との整理，原理の指導を通して―」『2017 年度 日本語教育学会春季大会予稿集』，pp.197-202，2017.
② 前原かおる・増田真理子・渡部みなほ・河内彩香・藤田朋世・菊地康人，「中国語学習を経て日本語学習を始める，非漢字圏学習者に必要な漢字学習とは―インタビュー調査と，漢字力診断テストの結果から示唆されること―」，『2016 年度 日本語教育学会春季大会予稿集』，pp.305-306，2016a.
③ 渡部みなほ・藤田朋世・猪股来未・前原かおる・増田真理子，「中級漢字圏学習者による「漢語の読みを仕分けるタスク」を観察する（2）―先行タスクの影響と既知語の利用に注目して―」，『日本語教育方法研究会誌』，22-3，pp.92-93，2016b.
④ 渡部みなほ・藤田朋世・前原かおる・増田真理子，中級漢字圏学習者による「漢語の読みを仕分けるタスク」を観察する―録画記録が示す学習者の読みの困難点―」，『日本語教育方法研究会誌』，22-2，pp.50-51，2015a.
⑤ 渡部みなほ・藤田朋世・増田真理子・前原かおる，「漢字圏学習者における日本語の漢語の読みの学習プロセス―読みが『h/p/b』となるケースの協働学習の観察から―」，『2015 年度 日本語教育学会春季大会予稿集』，pp.247-248，2015b.

〔学会発表〕（計 6 件）

① 前原かおる・増田真理子・藤田朋世・渡部みなほ・菊地康人，「漢字圏学習者の漢語の「読み」の安定のための指導提案―読みを困難にする種々の原因との整理，原理の指導を通して―」，2017 年度 日本語教育学会春季大会，口頭発表，2017.
② 前原かおる・渡部みなほ・藤田朋世・猪股来未・増田真理子，「中国語を母語とする日本語学習者への漢字指導の試み―気づきを通した学びのある教室の実現を目指して―」，第 16 回実践持ち寄り会・ブースセッション，2016a.
③ 前原かおる・増田真理子・渡部みなほ・河内彩香・藤田朋世・菊地康人，「中国語学習を経て日本語学習を始める，非漢字圏学習者に必要な漢字学習とは―インタビュー調査と，漢字力診断テストの結果から示唆されること―」，2016 年度 日本語教育学会春季大会，2016b.
④ 渡部みなほ・藤田 朋世・猪股来未・前原かおる・増田真理子，「中級漢字圏学習者による「漢語の読みを仕分けるタスク」を観察する（2）―先行タスクの影響と既知語の利用に注目して―」，日本語教育方法研究会，ポスター発表，2016c.
⑤ 渡部みなほ・藤田朋世・前原かおる・増田真理子，「中級漢字圏学習者による「漢語の読みを仕分けるタスク」を観察する―録画記録が示す学習者の読みの困難点―」，日本語教育方法研究会，ポスター発表，2015a.

⑥ 渡部みなほ・藤田朋世・増田真理子・前原かおる，「漢字圏学習者における日本語の漢語の読みの学習プロセス―読みが『h/p/b』となるケースの協働学習の観察から―」，2015 年度日本語教育学会春季大会，ポスター発表，2015b.

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：増田　真理子
ローマ字氏名：(MASUDA, Mariko)
所属研究機関名：東京大学
部局名：グローバルキャンパス推進本部
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：30334254

研究分担者氏名：菊地　康人
ローマ字氏名：(KIKUCHI, Yasuto)
所属研究機関名：東京大学
部局名：グローバルキャンパス推進本部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：40153069

研究分担者氏名：副島　昭夫　［2016 年 3 月まで］
ローマ字氏名：(SOEJIMA, Akio)
所属研究機関名：麗澤大学
部局名：外国語学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：20236144

研究分担者氏名：藤田　朋世［2018 年 10 月まで］
ローマ字氏名：(FUJITA, Tomoyo)
所属研究機関名：東京大学
部局名：日本語教育センター／国際センター
職名：特任助教
研究者番号（8 桁）：00728016

研究分担者氏名：河内　彩香［2016 年 5 月まで］
ローマ字氏名：(KAWACHI, Ayaka)
所属研究機関名：東京大学
部局名：日本語教育センター／国際センター
職名：特任助教
研究者番号（8 桁）： 90728015

研究分担者氏名：渡部　みなほ［2016 年 5 月より 2018 年 10 月まで］
ローマ字氏名：(WATABE, Minaho)
所属研究機関名：東京大学
部局名：日本語教育センター／国際センター
職名：特任助教
研究者番号（8 桁）： 10782782

※科研費による研究は，研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため，研究の実施や研究成果の公表等については，国の要請等に基づくものではなく，その研究成果に関する見解や責任は，研究者個人に帰属されます。